日本自閉スペクトラム学会

第 24 回研究大会プログラム

共生社会を目指して

― 自閉症児・者のウェルビーイングの追求 ―

2026 年 8 月 29 日(土)・30 日(日)

ライブ配信・オンデマンド配信

配信会場:弘前大学(青森県弘前市文京町一番地)

目　次

大会日程 ……3

大会参加者へのご案内 ……4

大会基調講演 ……5

大会企画教育講演 ……6～9

大会企画シンポジウム ……10

自主シンポジウム ……11

ポスター発表 ……12～13

大会日程 （ライブ配信）

	2026 年8月29日(土)	2026 年8月30日(日)
9:00		9:00～10:30 大会企画シンポジウム 「ASD 児の教育における UDL の可能性」 企画者　土岐賢悟(公立小学校長) シンポジスト　川俣智路(北海道教育大学) バーンズ亀山静子(SP) 宮﨑紀雅(島根大学) 指定討論者　高橋あつ子(早稲田大学)
9:30		
10:00	10:00～10:15 開会行事:学会理事長挨拶、事務連絡	
10:15		
10:30	10:30～11:30 基調講演 講演:本田　秀夫(理事長)	
11:00		11:00～12:30 教育講演③ 講演:菊地　一文 (弘前大学大学院教育学研究科)
11:30	11:30～12:30 昼食・休憩	
12:30	12:30～14:00 教育講演① 講演:広瀬　宏之 (横須賀市療育センター所長)	12:30～13:30 昼食・休憩
13:30		13:30～15:00 教育講演④ 講演:三上　珠希 (国立病院機構 青森病院)
14:00		
14:30	14:30～16:00 教育講演② 講演:中邑　賢龍 (東京大学先端科学技術研究センター)	
15:00		15:00～15:15 閉会行事:大会長挨拶、事務連絡
16:00		

※ 上記の緑色の部分(基調講演、教育講演①～④、大会企画シンポジウム、開会行事・閉会行事)をライブ配信いたします。ライブ配信を見逃した方は、オンデマンドでもご視聴いただけます。オンデマンド視聴期間は 9 月 10 日(木)～10 月 30 日(金)となっております。

※ 大会参加申込期間は 7 月 1 日(水)～10 月 23 日(金)です。

大会参加のご案内

1. 大会参加方法・費用

会員の方は、2026 年度の年会費の納入を済ませてください。

参加希望者は、大会ホームページの記載に従って、参加登録をお願いいたします。

参加申込期間： 2026 年 7 月 1 日(水)～ 10 月 23 日(金)

すべての発表者(筆頭発表者、連名者、企画者、司会者、話題提供者、指定討論者 他)は 7 月 29 日(水)までに、参加登録および参加費の納入まで済ませてください。

参加費用

会員区分	参加費
正会員	7,000 円
学生会員 / 当事者会員	5,000 円
非会員	9,000 円

※ お申し込み後はクレジットカード払い、コンビニエンスストア払いにて参加費を納入してください。納入を完了された方には「登録完了通知」のメールが届きます。ホームページの参加申込システムより会員番号・パスワードを入力してログインすると**領収書**の発行を受けることができます。

※ 参加費を納入された方全員に、9 月にメールにてオンデマンド視聴のご案内をお送りいたします。オンデマンド公開終了後 11 月初旬にメールにての**参加証**がダウンロードできる URL をお送りいたします。メールを受信したら速やかに参加証をダウンロードして保存してください。

2. 諸手続きの締切日および通信予定

日 程	自主シンポジウム企画者 ポスター発表者	連名者・連名発表者 自主シンポジウム登壇者	大会参加
6 月 5 日(金)～16 日(火)	発表・企画申込受付期間		
6 月 26 日(金)まで	発表・企画受諾結果連絡		
7 月 1 日(水)	大会参加申込 受付開始		
7 月 13 日(月)	大会抄録集原稿提出締切		
7 月 24 日(金)まで	抄録集原稿採択結果連絡		
7 月 29 日(水)	参加登録・参加費納入締切 自主シンポジウム企画者・登壇者、ポスター発表者・連名発表者		
7 月 31 日(金)	提出締切 発表動画(自主シンポジウム)・大会発表資料(ポスター)		
8 月 21 日(金)	自主シンポジウム、ポスター発表オンデマンド配信開始 ～10 月 30 日		
8 月 29 日(土)	大会 1 日目 ライブ配信(Zoom)※当日の講演は 9 月 10 日公開予定 ※オンライン開催のため現地での参加受付は行っておりません		
8 月 30 日(日)	大会2日目 ライブ配信(Zoom)※当日の講演は 9 月 10 日公開予定 ※オンライン開催のため現地での参加受付は行っておりません		
9 月 10 日(木)	教育講演、大会企画シンポジウム オンデマンド配信開始		
10 月 23 日(金)	大会参加申込締切(大会参加への最終締切)		
10 月 30 日(金)	オンデマンド配信終了		

大会基調講演 【ライブ配信+オンデマンド視聴】

8 月 29 日(土) 10:30～11:30

ウェルビーイングに焦点を当てた自閉スペクトラムの人たちへの支援

講演者:本田 秀夫(信州大学医学部子どものこころの発達医学教室
/日本自閉スペクトラム学会理事長)

近年、自閉スペクトラム(以下、「AS」)を疾患モデルから変異(バリアント)モデルとして捉える方向へのパラダイムシフトが促進され、「ニュ―ロダイバーシティ(神経多様性)」(Armstrong、 2011)、「ニューロトライブ(神経学的種族)」(Silverman、 2015)などと表現する考え方が急速に広がっている。それに伴い、支援のあり方をめぐって大きな議論が巻き起こっている。たとえば、従来の応用行動分析に基づく支援技法に対して、ニューロダイバーシティの視点からさまざまな批判が生じた。批判の主たる論点は、従来の支援の視点が定型発達に近づけることを目標として医療モデルに偏り、当事者の内的体験を軽視し、自己決定の発達を阻み、トラウマ体験を助長するリスクが高まることなどに向けられている。この動きに対して、応用行動分析の立場の支援者からも「ニューロダイバーシティ肯定的支援(neurodiversity-affirming interventions)」の考え方を重視する意見が出されている。たとえば、応用行動分析の流れをくむ Early Start Denver Model (ESDM)の開発者の 1 人である Dawson(2022)は、支援には当事者も参入した意思決定が必要であるとした上で、AS 特性の軽減や消失を支援成功とみなす前提を再検討する必要があると述べている。

ここでは、AS の人たちへの支援の新たな前提の1つとして、ウェルビーイング(well-being)に焦点を当てる。ウェルビーイングは古くから一般に用いられている言葉であり、学術的な単一の定義はないが、ポジティブな感情、生活満足、充足感等を含み、自分の人生を肯定的に評価し、よい状態だと感じていることを示す概念といえる。

ニューロダイバーシティの視点からは、ウェルビーイングの評価についても見直しが必要との意見がある(Simpson et al, 2026)。従来の研究は定型発達の人たちのウェルビーイングの指標を用いていることや、家族など本人以外の代理意見をもとに行われていることなどから、AS 特性の人たちの真のウェルビーイングを検討できていない可能性がある。

一方わが国では、発達障害児者に対する地域支援体制の整備は一定程度進められてきたが、子どもでは主として学力、成人では主として職業的スキルといったスキルに基づく処遇のあり方を中心に進められており、当事者および家族のウェルビーイングの保障という視点は十分とは言えない。今後は、スキルだけでなくウェルビーイングの視点からも支援のあり方を考えていく必要がある。

大会企画　教育講演①　【ライブ配信+オンデマンド視聴】

8 月 29 日(土) 12:30～14:00

神経発達症のアセスメント・診断エラー

講演者：広瀬　宏之（横須賀市療育相談センター）

そもそも、診断にはどんな意味があるのだろうか？　身体疾患に関して言えば、診断は治療と予後に直結する。胃潰瘍と胃癌の違いを考えればそれは明らかであろう。

では、神経発達症における診断にはどんな意味があるのだろうか？　演者は、神経発達症は支援の対象であって、治療の対象ではないと考えている。とすると、神経発達症の診断は支援に直結するのだろうか？神経発達症の診断は予後を占うのであろうか？

それには「神経発達症において、正しい診断がなされなければ、正しい支援や正しい予後は望めない」との仮説について考えてみれば良いだろう。演者は「この仮説は少しだけ正しい」と思っている。

もちろん、正しい診断があるに越したことはない。でも、聴衆の皆様が日々体感しているように、さまざまな事情で正しい診断に到達していない、だけれども適切な支援と良好な予後に到達しているケースは少なくない。身体疾患では、これは滅多に生じない。診断が間違っていれば、普通は、正しい治療に到達しっこないのである。

さて、これまで診断という用語を用いてきたが、神経発達症における診断は、医学的診断とは様相を異にする。

身体疾患では、臨床症候から適切な原因検索を行って、正しい診断に到達しうる。神経発達症の場合は、臨床症候を正しく集めて、DSM なり ICD という診断体系の、一つもしくは複数の状態像に当てはめるのである。大きな声で言ってはいけないのだが、演者は神経発達症の診断は医療にとどまらないと思っている。より社会的な表現をすれば、診断というよりもアセスメント、教育用語で言えば見取りという表現がしっくりくるだろうと思っている。

ここまでが、診断という営みをめぐる長い前置きである。これを踏まえて、どうしてアセスメント・診断エラーが生じるのかについて論じるのが、本講演の主眼である。

第一は情報収集不足である。アセスメントには生活全般とこれまでの発達史を広く概観することが不可欠である。

第二に一元論の陥穽である。一人の子どもに複数の神経発達症がラベリングされることはしばしばある。一つのラベリングで満足してはいけない。ADHD の背景に ASD が潜んでいないか、必ず確認する必要がある。

第三は支援者の偏見である。ADHD なら良いが ASD と診断するのは可哀想だ、などの潜在意識がその例である。

第四は支援者の凸凹と育ちである。自身の凸凹に開かれていないと、間違った方向に進んでしまう。

以上が講演の四ヶ月前に演者の脳内で連想していることである。当日も概ね上記に沿った講演を行いたいと思っているが、Here and Now の連想も織り交ぜて、晩夏のひと時、聴衆の皆様と連想を紡いでいければ幸いである。

大会企画　教育講演②　【ライブ配信+オンデマンド視聴】

8 月 29 日(土) 14:30~16:00

スマホや生成 AI が変える自閉スペクトラム症の未来

講演者:中邑　賢龍(東京大学先端科学技術研究センター)

スマートフォンやパソコンなど ICT(情報通信技術)は人の認知機能を拡大・増強する便利なツールとして日常的に利用されている。自閉スペクトラム障害の人にとっては、それに留まらず苦手な機能を補助・代替するツールとして不可欠なものになっている。例えば、オンライン会議、オンラインショッピングなどのインフラ利用により、対面でのやり取りが苦手な人もストレスを抑え生活できている。さらに、生成 AI は、情報の整理・文章作成・感情理解など、従来の ICT ではカバーできなかったことも補助するツールとして期待されている。

近年、生成 AI やフィジカル AI が仕事業態を変化させるという議論が盛んになっている。実際に、経理やプログラミングなどのホワイトカラーの業務が AI による代替で減少する一方で、水道修理や電気工事など高度な手作業や現場対応が求められる分野では労働力が不足している。こうした流れは、自閉スペクトラム症の人々にも影響が及ぶ。反復する単純な定型業務などはすでに生成 AI やロボットによって代替されてきている。これまで強みとされてきた優れた感覚を活かした細かい創作活動の分野も例外ではない。画像生成 AI に「自閉スペクトラム症の人のタッチでライオンを描いて」と指示すると、カラフルで独創的な詳細画がすぐに生成される。これまで人間固有の表現と考えられていた芸術活動でさえ、AI が再現できる時代になりつつある。

教育には、社会を支える人材を育成するという役割があるが、生成 AI が社会に深く浸透する流れの中、教育全体のあり方は大きな転換点を迎えている。これまで、就労を見据え、企業が求める技能や作業態度の獲得を目指した特別支援教育も定型的な作業の多くが AI や機械によって代替されるようになれば、その目標の見直しが必要になる。

物を作る行為に喜びを感じる人も多い。その生産活動を否定するものではない。そこに、「誰がどのような経験や想いでその作品や仕事を生み出しているのか」という物語が必要になると考える。これまでは障害のある人を一括りにし「障害者が一生懸命作りました」という点を強調してきた。それとは違い、これからの教育には、一人ひとりの個性や興味、価値観を個別に伸ばすことがより一層求められる。個々が主体的に学び働き、時には生成 AI を活用して創作した結果を、個々の物語として示していくことが生成 AI と差別化する点として重要になるだろう。

生成 AI を使うべきか、使うべきでないかという議論は、もはや本質的な問題ではない。AI の活用が前提となる社会において、私たちは効率化だけを追求してきた社会の仕組みをどのように再設計するのかを考える段階に来ている。

大会企画　教育講演③ 【ライブ配信+オンデマンド視聴】

8 月 30 日(日) 11:00～12:30

ASD のある児童生徒のウェルビーイングに向けたキャリア発達支援

講演者： 菊地　一文(弘前大学大学院教育学研究科)

第4期教育振興基本計画(文部科学省, 2023)では「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根指したウェルビーイングの向上」の2つのコンセプトを示した。これらのコンセプトを実現するための取組のひとつとして学校現場において充実が図られてきた「キャリア教育」の取組に着目したい。

「キャリア」とは「人が生涯の中で果たす様々な役割の過程で、自らの役割の価値や自分との関係を見いだしていく『連なりや積み重ね』」を意味する。役割には「職業人」だけではなく、「家庭人」「学生」「市民」「余暇人」などの様々なものがあり、これらの役割をとおして子どもたちも私たちも物事に対する見方や考え方、受け止め方に影響を受けている。

そして「キャリア発達」とは「社会の中で役割を果たすことを通して、自分らしく生きていくことを実現していく過程」と定義されている。子どもたちにとって、1 日の大半を過ごす場が学校であり、その中で「学ぶ」ことが大きな役割となる。まさに子どもたちは学校生活において学ぶことをとおして物事の見方や考え方、受け止め方にたくさんの影響を受けていることになる。

「社会の中で役割を果たすことを通して、自分らしく生きていくこと」は、自身の役割や、していることに対して自分なりに意味付けがなされることを意味する。つまり単に何かを「させて」「できるようにする」のではなく、子ども本人が「なぜ・なんのため」それをするのかといった目的意識をもてるような支援のあり方が問われているのである。

さらにこの定義には、最後に「過程」とあることにも注目したい。人はいつも物事をポジティブに受け止め、うまく成し遂げるとは限らない。時にはネガティブに受け止めてしまうことや、失敗することもある。そのことと向き合いながら、後になってその意味や価値に気付けることもある。つまり、「意味付けや価値付けは経験によって変わりうる」のである。

いずれにしてもその答えは本人の中にあり、それをどのように認識するかによる。キャリア発達は教え込みによって促されにくく、他者との関係や対話をとおして価値付けられるなどして、自身の中で生じる気付きや意味付けによって得られる変化と言える。

自閉スペクトラム症のある子どもたちの「好きを育み、得意を活かす」と共に、私たち自身が彼らへの見方を変え、特性と言われる困難な側面を捉え直すと、「強み」に転換することが可能となる。本講演ではキャリア発達の視点から、彼らの「できること」や「強み」に着目し、これらを踏まえた活動の展開や、苦手とされている他者とのかかわりをとおした地域協働活動等の取組をもとに、彼らの成長の可能性や、かかわる側の変化について参加者と共に考えたい。

大会企画　教育講演④ 【ライブ配信+オンデマンド視聴】

8 月 30 日(日) 13:30～15:00

診察室から地域へ　ASD 児支援を広げるコミュニティ小児科学
～園・小学校・医療を結ぶ地域ネットワークの深化と広がり～

講演者：三上　珠希(国立病院機構　青森病院)

「診察室から地域へ」という視点のもと、ASD 児支援を地域に広げるための コミュニティ小児科学 の実践と課題について考えます。現代の子どもを取り巻く環境は大きく変化し、対面での遊びや親子の直接的な関わりが減少し、ICT 機器の普及によってコミュニケーションの質が変容しています。また、スマホネグレクトのように、ASD 児にとって新たな困難となる状況も生じています。文部科学省が乳幼児期の発達課題として挙げる愛着形成、基本的信頼感、対人経験、生活リズムの確立は、かつては家庭で自然に育まれていたものですが、現代では社会的支援を必要とする領域へと変化しつつあります。

ASD を「少数派の発達の一類型」と捉える視点は、二次障害を防ぐための環境調整の重要性を示しています。ASD 児の自然な発達経過を理解するためには、家庭・園・学校・医療・福祉が乳児期から情報を共有し、子どもを多面的に見守る体制が不可欠です。また、神経発達症の診断には生活場面の情報が必須であり、医療のみで評価することには限界があります。さらに、立ち位置から見える景色が違うために、医師は子どもを「only one」として診る一方、学校は「one of them」として集団の中で支援するため、合理的配慮が共有されにくいという構造的な課題も存在すると感じています。

国際的には、米国で biopsychosocial モデルに基づく Bright Futures が実践され、コミュニティ小児科学が体系化されています。日本でも 2024 年に日本小児科学会がコミュニティ小児科学を定義し、地域全体で普遍的な支援システムを構築する必要性が示されました。しかし、実際の実践には様々な課題があります。こうしたコミュニティ小児科学の実践を支える契機として、こども家庭庁が令和 10 年度までに全国導入を推奨している５歳児健診が期待されます。また５歳児健診は、子ども達に対しても幼児期から学童期への切れ目ない支援を受けることを実現する重要な起点となる可能性があります。

青森病院発達ネウボラプロジェクトでは、7 年前より青森市浪岡地区において、保育園・学校・医療・福祉が連携し、乳幼児期から学童期へつながる支援モデルの構築を試行してまいりました。本講演ではその活動についてもご紹介し、地域における ASD 児支援の今後の方向性について皆さまと共に考えていきたいと思います。

大会企画シンポジウム 【ライブ配信+オンデマンド視聴】

8 月 30 日(日) 9:00~10:30

ASD 児の教育における UDL の可能性

企画者: 土岐 賢悟(弘前市立第三大成小学校)
シンポジスト: 川俣 智路(北海道教育大学大学院教育学研究科)
バーンズ亀山静子(ニューヨーク州認定スクールサイコロジスト)
宮﨑 紀雅(島根大学大学院教育学研究科)
指定討論者: 高橋 あつ子(早稲田大学大学院教育学研究科)

2022年12月、文部科学省は「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」を公表しました。それによると、通常の学級に在籍する学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合は 8.8%であり、ASD 児もこれに含まれています。また、通級による指導を受けている児童生徒と特別支援学級に在籍する児童生徒の数は年々増加しており、その中の ASD 児の数も同様に増加しています。

このような現状を踏まえ、令和3年の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、副題に「全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現」が掲げられました。また、令和6年に文部科学省が公表した次期学習指導要領に向けての論点整理においても、「教師主語の視点のみならず、学習者主語の視点」で教育活動を見直す必要性が示されています。

このような動きの中、次期学習指導要領が掲げる「個別最適な学び」や「多様性の包摂」の理論的基盤として、UDL(学びのユニバーサルデザイン)が近年ますます注目を集めています。UDL はアメリカの CAST が提唱している理論的枠組みで、主体的に学ぶことができる学習者を育成することを目指しています。UDL のフレームワークを学習環境デザインに取り入れることで、自分の学びを主体的に舵取りできる学習者の育成が可能になります。

本シンポジウムでは、ASD 児の教育における UDL の可能性に焦点を当てます。川俣智路先生には「UDL とは何か」の基礎的な解説を、宮﨑紀雅先生には UDL の実践報告と ASD 児への支援の可能性を、バーンズ亀山静子先生には日本における ASD 児支援に UDL の枠組みを適用することの意義をそれぞれ中心に話題提供いただき、ASD 児のウェルビーイングの視点を踏まえながら、参加者の皆様とともに議論を深めたいと考えています。

自主シンポジウム 【抄録+オンデマンド視聴】

自主シンポジウム１

知的障害のある青年と保育・教育・心理職を志す大学生が「大学で共に学ぶ」ことによる関係性の深まり

―相模女子大学インクルーシブ生涯学習プログラム「ゼミ活動」の実践から―

企　画　者: 宮野 雄太（相模女子大学学芸学部）
司　会　者: 日戸 由刈（相模女子大学人間社会学部）
話題提供者: 宮野 雄太（相模女子大学学芸学部）
　　北村 也実（相模女子大学インクルーシブ生涯学習プログラム）
　　中和 朱里（相模女子大学インクルーシブ生涯学習プログラム）
　　白川 心一（相模女子大学インクルーシブ生涯学習プログラム）
指定討論者: 本田 秀夫（信州大学医学部）

自主シンポジウム２

子どもの主体性を支え、共に育む支援

―異なる課題に向き合う 3 人への長期にわたる支援事例から―

企　画　者: 渡辺 忠温（一般財団法人発達支援研究所）
司　会　者: 山本 登志哉（一般財団法人発達支援研究所）
話題提供者: 石黒 留美（（株）クラ・ゼミ こどもサポート教室）
　　小沼 真乃（（株）クラ・ゼミ こどもサポート教室）
　　松村 直子（（株）クラ・ゼミ こどもサポート教室）
指定討論者: 赤木 和重（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

ポスター発表 【抄録+発表資料+質疑応答(メール)】

P-1～P-17

ポスター発表掲示期間:　8 月 21 日(金)～10 月 30 日(金)
質問期間(メールによる):　8 月 21 日(金)～　8 月 30 日(日)

○は筆頭発表者

P-1　インターセクショナリティによって増幅される「認識的不正義」
―大学における支援者の対応に関する当事者学生の一考察―
有賀　光(信州大学大学院総合人文社会科学研究科)

P-2　ペアレント・トレーニングに動機づけ面接と認知行動療法を組み合わせた発達障害児の保護者への研修
―思春期の子どもの QOL に及ぼす効果および社会的妥当性の検証―
河村　優詞(八王子市立宇津木台小学校，環太平洋大学)

P-3　知的障害特別支援学校高等部における自尊感情の育成
佐藤　裕樹(東京都立板橋特別支援学校)

P-4　ASD 当事者における自己理解・障害受容と就労適応の変化
―認知行動療法、腹式呼吸および当事者活動を長期継続した単例報告―
森　治樹(公立教育機関事務職員(会計年度任用職員)，自治体障害福祉関連委員)

P-5　背景特性を考慮した ASD 児の母親のスティグマ経験の比較
―ラテン系および白人の母親の語りから―
ポーター　倫子(北陸学院大学教育学部，テキサス大学ヒューストン医療科学センター)

P-6　自閉スペクトラム症女性が活用可能な身だしなみ尺度の開発に向けた内容的妥当性の検証
森　京花(北九州市立大学)

P-7　AI アプリの共創現場から考える、視覚的構造化のコツ
―『こどもめせん』への改良リクエストから―
塙　孝哉(株式会社こどもめせん)

P-8　自閉スペクトラム症者とその家族が東日本大震災で経験した困難な出来事とそれを踏まえた今後の大規模災害への備えの検討
―災害フェーズごとの想起によるインタビュー調査から―
泉田　さとみ(仙台青葉学院大学，東北大学大学院教育学研究科)

P-9　発達障害児に対する学校関与の多職種連携に関する研究動向
岡本　邦広（新見公立大学）

P-10　メタ認知を親モデルとした自閉症支援の整理と研究の方向性
―視覚支援をメタ認知の外在化として設計する―
古林　紀哉（株式会社古林療育技術研究所）

P-11　「プロジェクト・インパクト」ケース報告
―子どもの社会的コミュニケーション能力を育むペアレント仲介型介入の実施―
〇石井　篤子（大阪大学大学院連合小児発達学研究科）
村田　絵美（大阪大学大学院連合小児発達学研究科）

P-12　自閉スペクトラムの子どもたちの参加を評価する12項目短縮版質問紙（PQP-12）の開発と信頼性・妥当性の検証
〇中村　拓人（神奈川県立保健福祉大学）
立岡　さくみ（コネクトしぶや）

P-13　ASD 当事者と非当事者との協働学習をいかに成立させ、効果を高めるか
―オンラインでのペア課題取り組み実践を通した条件の検討―
沼崎　麻子（北海道大学大学院教育学研究院）

P-14　自閉スペクトラム症のある成人が捉える主観的ウェルビーイングの多面的構造
綿貫　愛子（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科）

P-15　何を問題として見るのか
―ASD 者との対話実践を通して―
大内　雅登（Care-Media Labo）

P-16　知的障害特別支援学校の教員における児童生徒への進路指導に対する認識
松山郁夫（鎮西学院大学）

P-17　強度行動障害のある自閉スペクトラム症者の地域移行と地域生活を支える重度訪問介護の実践 ―重度訪問介護による一人暮らし支援とチームアプローチ―
〇中山 浩二（特定非営利活動法人おかえり）
財部 志穂（特定非営利活動法人おかえり）

特定非営利活動法人 日本自閉スペクトラム学会
第 24 回研究大会実行委員会

大会実行委員長：　土岐　賢悟（弘前市立第三大成小学校）
大会事務局長：　前田　宣子（星槎大学・黒部発達相談室）
事務局：　小川　博敬（社会福祉法人フレンドシップいわて　虹の家）
　　北川　雅恵（滑川市こども家庭センター）
　　菊地　一文（弘前大学大学院教育学研究科）

2026 年 8 月

日本自閉スペクトラム学会第 24 回研究大会プログラム

編集　**日本自閉スペクトラム学会第24 回研究大会実行委員会**

学会事務局　**特定非営利活動法人 日本自閉スペクトラム学会**
〒273-0866　千葉県船橋市夏見台 3-15-18
TEL：047-430-2010
jimu@autistic-spectrum.jp
https://www.autistic-spectrum.jp/